

審査の結果の要旨

氏名 永瀬 節治

本論文は社寺境内や参道、門前町などによって形成される一連の空間を参詣空間として一括し、その空間的社会的特性を把握することを目的としたものである。とりわけ近代において鉄道の発達などと共に変容し、新たに形成された近代的参詣空間の経緯と特質を明らかにし、その社会的文脈を明らかにすると同時に、今後の参詣空間のあり方に示唆を得んとするものである。

論文は、研究の枠組みと目的、方法を述べた序章に続いて、参詣空間の原型とその近代における展開を論じた第1部、および近代における参詣空間の実相を事例をもとに詳述した第2部、そして結論を述べる結章から成っている。

第1部はさらに参詣空間の原像を中心に論じる第1章、近代における参詣空間の変容の諸相を述べる第2章、参詣地における近代交通手段の導入と共に変化する空間構成を明らかにする第3章とから成り、付論として参詣地における社寺風駅舎の出現の背景を論じている。

第2部は事例研究として、明治初期の出雲大社門前町を論じる第4章、明治神宮表参道を対象とする第5章、昭和前期の出雲大社門前町を論じる第6章、橿原神宮を論じる第7章から成っている。

第1章は、近代の参詣空間の原型として、近世に成立した社寺参詣行動を実態を明らかにし、参道空間や門前町の主たる空間形態の特色を整理している。

第2章は、明治初年の社寺境内地の公園指定が参詣の実態を大きく変容させることとなったこと、しかし、国家神道のもとで神社の森厳さの保持が神苑整備や風致の保護などの点において突出し、寺院との差異化が行われたこと、さらに昭和初期における観光熱の高まりによって、参詣客誘致が重要な政策となり、聖と俗との交錯に特徴付けられることを明らかにしている。

第3章は、明治中期から昭和初期にかけての参詣路線の整備の全貌を明らかにした章である。地形条件や門前町の形態に留意しつつも、参詣客の利便性を優先した駅の立地が参詣空間のあり方を大きく変えていったことを明らかにしている。同時に、参詣行動が宗教的な行為ととらえられるよりも誘客による地域振興の手段と見なされるようになり、参詣空間の質的変容が進んだことも明らかにされている。

第4章から第7章は事例研究である。

第4章においては、鉄道敷設を契機とした出雲大社神門通りの創出過程が明らかにされている。シンボリックな軸線を備えた近代的な参詣空間である神門通りが成立していった過程において、神苑の延長と神門としての宇迦橋の建設の意図を明らかにしている。

第5章においては、都市計画事業による明治神宮表参道の成立過程を論じている。表参道は、日本大博覧会計画を転用した明治神宮の敷地計画のうち、唯一独自に計画され、実現したものであることを明らかにし、西欧のブルバール概念と並木を備えた神社参道概念の交錯と融合によって日本で始めてケヤキ並木が本格的に導入された例として特色があることを明らかにしている。

第6章においては、昭和前期における出雲大社神苑の成立と観光振興の関係について論じている。俗的な要素を排除し、森厳性を拡張することを目指した出雲大社神苑計画の経緯を明らかにするとともに、観光振興策の一環としての参道整備としての性格を付与された参詣空間の実情を分析し、参道並木と神門通りが連結する象徴的な動線が成立したことを明示している。

第7章においては、紀元二千六百年記念事業として構想された神都橿原とその中核である神武天皇を祀る橿原神宮の境域拡張事業の実際とその背後の思想を明らかにしている。そしてこのような大規模な空間整備事業の背景に、明治中期以降の継続的な地元の地域振興の意図があったことを論じている。

最後の結章は、それぞれの章の結論をまとめたのち、総合的考察として、参詣空間を地域づくりのひとつの基点としてとらえることにより、ある種の公共性を備えた地方の官国幣社が地域づくりのひとつの心情的拠点となり得た事情を論述している。また近代において参詣空間はより直截に地域振興の場となり得た。地域の人々に心情的にも経済的にも共有された参詣空間は、同時に地方の人々のみならず来訪者にも開かれた空間であり、独特の公共性を有していた点において、特異な地域づくりの事例として位置づけることができると論じている。

以上、本論文はこれまでまとまった論じられることのなかった近代における参詣空間の成立と展開の歴史に関して正面から論じた初めての論文として貴重である。とりわけ近代の参詣空間が一定の公共性を多方面において有していたことが独自の地域づくりを推進する契機となったという分析は、この分野の研究に新しい考察の視点を提供するものとして高く評価することができる。

よって本論文は博士（工学）の学位申請論文として合格と認められる。